味をやつたなと感じ入つた。山門は舊の如く、群れるる鳩も舊の如く、御堂も舊の如くであつた。市内バスで來る信徒が床下に御階段めぐりといふことをして、陰濕な空氣の中に、鎖に手の觸れるのを希つて、極樂往生の結緣だと喜ぶことも舊の如くであらう。かう思つて、禮拜一揖して足を右に向けた。

○

右に御堂を去る二三町に城山があつて、川中島平一圓を瞰下し得る。こゝの城山館には思出が多い。車を駐めて晝食を命じ、それの出來る迄の間を樓上の欄に倚つて、最前の尊像在否論に就いて考へて見た。あるのなら、あると斷言してゐればいい。無いのなら、無いとしなければなるまいが、それは歷史家や考證家に任せて置くがいい。此二者がどう說いた所で、一々信者たちに、さう信じさせる必要がない。もしそれ善光寺如來に奉仕する四十幾坊とやらを統治する大勸進の大僧正や大本願の御上人樣、それ以下の人たちが學德圓滿で、如來の信を維ぐだけの實を備へてゐるのなら、誰が本尊佛の有無などを問題にしよう。信は莊嚴より起るといふが、それは山門や本堂の宏麗をいふのでなく、奉仕僧の袈裟衣の美しさをいふのでも無い。奉仕僧の學德と誘導化益の上に、すなはち自行化他の上に遺漏の無いことであらねばならぬ。かつて親鸞上人は實在の人か否かが論ぜられた。私は勿論實在の人だと思ふが、これも教旨を捧持する善知識だにあれば、だとへ實在の證跡が薄弱であるにせよ、其教の立派さが少しも減殺される譯のものでない。法主にしてもさうだ。それがどんな幼年者であらうとも、碩德の老僧たちが私利を棄て、心を一にして、擁護拜戴の誠を致したなら、別に問題の起らう筈はない。選擧管長を戴く宗派にしてもさうだ。宗祖の遺教を奉じて、黨派心を棄て、擁護と共に化導に力を竭したなら、醜聞沙汰が新聞紙上を賑はす處などは萬以てあるまい。各派の大本山より始めて三四の末寺を有する小本山までが繼承問題がやかましく、それが概ね金錢で解決されてゐるのが當今の實情ではあるまいか。困つたなどといふ以上の問題だ。此儘で十年二十年を過したらどうだらう。檀信徒から侮辱冷笑の眼を向けられることが今日に幾倍する事であらう。我等は決して今日の宗教家諸君に、往昔の如き隱遁生活を要めるのではない。現代に適應した生活をするのを拒むので

もない。たゞ餘りに政治的手腕家が多くて、爭の絶えない事を厭ふのである。

○

社會事業方面に進出して、感化救濟に營々たる人々は、まだまだ尊敬に値するが、宗教の本義から言つたら、もつと精神界に向つて働きかけるのが、よりよき仕事なのではあるまいか。他は一己の蓄財や經營に沒頭し、もつと降つては盆栽、圍碁、玉突等の餘技に耽る者の尠くないのを憂へるのである。さうして其何れもが聽者の理解し易からざる經典の捧讀に終始してゐるのなら、まさにそれは本體をくらまして、攻擊を免れる爲の煙幕を放つものではあるまいか。煙に捲かれるといふ諺は火災の時の事らしいが、當今は煙に捲ぐことを力める者のみが多い。難解の語句文章によつて、自己の無定見や非力や不充實や淺薄さを掩はうとするなら、皆これ煙幕生活者である。今の世に學者と呼ばれるものや、僧侶たるもので、此生活をしてゐないものは、果してどれだけあるのであらう。無闇に外國語を交へて書き、又話す者も煙幕生活者である。借金方策で立つ實業家、甘言虛構や責任轉嫁で立つ教育者、政治家、嗚呼何ぞそれ煙幕生活者の多きことぞ。

○

かう對手なしの憤激に耽つたが、いや待て、本尊樣なしで濟ますのも煙幕生活であり、幼法主や、非力管長等もやはり煙幕生活をするものだといはれても仕方があるまい。但し、人まかせで、何も仰せられない御神體や佛體に對して、煙幕、呼ばはりをするのは不當に屬すると共に冒瀆に失するだらう。世間にさう仕向ける側侍者だけが本體暴露を厭ふ煙幕生活者だと評すべきであらう。中には現實暴露は教化上に害があると考へて、包裝主義を執る人もあるだらうが、それも衷心に於てやましく思はないものが、眞實どれだけゐるだらう。緣起を說き式例を追つて衣食してゐるだけでは、やはり煙幕中に日を送るわけで、生きがひが無いではあるまいか。なほそれからそれへと思を馳せてゐた。

折しも脚下から午時を報ずる大號音。「どうも手間どりまして」と女中が膳を捧げて出て來た。

八　教材としての淨瑠璃

（昭和十一年十一月稿）

1　特殊教材

國語教育の教材として、淨瑠璃は如何なる待遇を受くべきであらうか。勿論特殊待遇を受くべきである。特殊にも良い方への特殊と、悪い方への特殊と、もう一つ此中間に位する所の敬遠される特殊とあつて、敬遠されるのは、どちらかといへば悪い方へ入れて見るべきである。

脚本の敍述　淨瑠璃を淨瑠璃文學の意に解して、其曲節に就いては、暫く考慮の中から省いて述べるであらう。本當ならば淨瑠璃といふ語り物は、散文と律語、すなはち語句の排列上に拘束のないものとあるものとの中間に位すること、かの謠曲と同一種に屬するものである。いふ迄もなく、謠曲は能樂の脚本で、これには地の所と獨白や問答の所とある。又能樂が狂言に比しては劇としての純正さを缺いてゐるが如く、謠曲も狂言の脚本に比しては同じく純正さを缺いてゐる。

一體純正劇の脚本なら、舞臺裝置や場面轉換や役者の出入、多少の科（しぐさ）に關する略説明等の所謂トガキがある以外は、獨白や對話だけが書き連ねてある。然るに淨瑠璃は此白（せりふ）を敍する部分は少く、却つて作者が事件の由來や場面の光景や作中に出る人物の意志や情緒や心の動き方を敍する方が大部分を占めてゐる。いひかへて見れば、敍事詩的抒情詩風で、劇の脚本としては變體扱をせらるべき性質のものである。さうして其半分が音樂的要素の上に立つもので、この點からいへば、謠曲と共に樂劇の脚本として考へらるべきものである。けれども其白は語られるもので、謠はれる所はあつても歐米諸國でいふ樂劇とは約束が合致しない。やはり樂劇脚本としても變體扱をされても止むを得ないものである。しかしながら、私はそんな事はさつぱり構はないと思ふ。何となれば、能樂も操人形芝居も、いつて見れば我が國の特技であつて、歐米諸國には、此體樣のものがあまり行はれてゐなかつたのである。よし、あつても極めて幼稚なもので

あつた。そこで樂劇なり純正劇なりの定義を下す際にさう考慮されなかつた迄で、我等は此場合にあつては、歐米が純正劇と見ない純樂劇と見ないといふがために、わが國に於て何百年來行はれ且つ喜ばれて來た純樂劇や操人形劇を輕視するには及ばないのである。及んだら不當であつて、自己の蒙昧を披露することであらう。但し私は兩者に改善の餘地がないといふのでは無い。それはあらうかとも思ふが、私はああも完成されてゐる者には手をつけないがよく、改善するといふなら、新たに作り出す方が效果があがると信じてゐるのである。殊に國語教材としては其作品の內容形式兩方面にわたつて、雅正・洗練・秀潤・淨化・啓發・誘導等が考慮せらるべきものであれば、少なくとも過去に出た出色の文字、溫健妥當な敍述のうちに、適宜な刺戟力を有するものでなければならぬ。國民性涵養だの趣味性の向上を圖るだのといふが如きはいはなくても知れてゐる。

古雅と卑野　さて能樂は武家の式樂用であり、常時の娛樂用であり、其脚本である所の謠曲を口吟することは、更に自己の品位を損ふものとは思はれずに來た。今もさう考へられてゐる。私もそれに異論を挾まうとは思はない。但時代の相違といふ濃厚な霧が、今の我等との中間を隔ててゐることを如何ともし難い。上品下品は其意味が澁晦であると否とによつて區分される。語彙の少なかつた時代に記されたものは、今の我等にはとかくに幾樣にも解釋せられる耳遠い語が多い。隨つて意味が明瞭にとれない。意味が露骨でない。ぼかされてゐる。否薄墨がかけてある。物の形も心もはつきりしない。一言にすればよく分らない。人の心は斯樣なものに對して、意味が了得出來ないのは自己の修養が足らない爲であると考へる。さうして自分にはそれに對して批判を下す力が無いのだと思ふ羞恥の念が、遂に古風を古雅と解し、古雅を上品と解するに至る。これが古代文學が崇敬を保ち得た主因である。もつとも古文學で今世に傳はるものは優秀な作品であつたが爲に相違ないのだが、試みに近代文學の並品と比較して見、文化の度の高低をも參酌して、果して其何れに團扇を上げ得るであらうか。私は近代文學にも絕えず寓目しなければならない境遇にゐるのだが、實は古文學の方がすきで、見方に於ては其どちらにも偏傾してゐない積りである。それであつて猶かつ、近代文學の方に手をあげなければならな

いことを感ずる。勿論人々の嗜好の相違によつて今古何れに傾くかが極まるのであれば、決定的に近代の物の方がよいといふのではない。誰が考へても中等教科用の教材としては江戸時代及び現代の文學が十の七八を占むべきで、現にさうなつてゐる。其江戸文學中に於て淨瑠璃はどれだけの座席を與へられてゐたであらうか。

謠曲と淨瑠璃　かの謠曲は羽衣、鉢木、隅田川、高砂、竹生島、稀に熊野なんどの數曲が教材になつてゐた。此謠曲には難解といふ短所はあるが、短篇だといふ長所がある。又澁晦の個所を含むといふ弱點があれば、含蓄に富むといふ强味があつて、教へる者が器量一ぱいに能力を示し得るといふ好都合がある。然るに淨瑠璃は長篇に失して、謠曲の如く其全篇を示すことが出來ない。もし其全篇を掲げるとしたら、現行教科書の一冊を費すことを覺悟しなければならぬ。けれどもそれは到底許さるべきことで無い。自然掲げるとすれば、數頁内に收められるだけの一部分をといふことになる。現にさうだ。さて又淨瑠璃は所謂神祇、釋教、戀、無常の諸面にわたつて、人情の極致に觸れてゐるといつた古人の言を其まま用ひて、淨瑠璃ばかりが優れてゐるやうな、そんな偏狹なことを繰返さうなどとは、てんで思つてもゐない。しかしながら義理と人情との衝突を描いて、其解決が人々の道義觀を滿足せしめること、人生に對する思慮反省を求めることゝ、すなはち人間胸底の琴線に觸れることは、平曲よりも謠曲よりも淨瑠璃が勝つてゐる。朦朧で刺戟力の弱い古物語の如きは、此場合に於て、比較を求めて登場する資格は無い。

喰はず嫌　世には喰はず嫌とて、あたまから否認してかかるものがある。特に芝居以下の、遊藝と呼ばれる技能物にあつては、此殃災を强ひられるものが多い。此等は士君子の觀るべきものでないといふ考、こんな古い考は、もう今の世にあらう筈がない。敢て青年學徒の言を借りるのではないが、劇は綜合藝術として最も代表的のもので、人生の縮圖であるといふ位のことは、今更に說明を要すまい。寄席一度覗かず、映畫一度見ない人、蓄音機には耳をふさぐ人、ラヂオの前は急いで通るといふやうな人、こんな人は恐らくあるまい。あつたら現代を離れた仙人生活に安住する人といふべきである。そんな人は我等の考慮に加

へないがよい。それが此主題を考へる上に於て極めて當然なことであらう。なぜかといふに、現代人に對する教材を考慮する場合なのである。何も現代少青年の傾向に阿附追隨をせよといふのではないが、少青年だ所で、心身に慰安を與へるものがなくては、やつて行けるものでない。一般民衆にしてもさうだ。これが娯樂機關の發達が、軍器の進歩と競爭し得た所以である。將來も多分それであらう。

かう迄述べたら、いやもう分つた、淨瑠璃も其意味で一課や二課分は教材として選んでもよい。君の說は分つた分つたと逃げを張る學者教育者が尠くないであらう。眞に理解してさういふのなら、私は身の光榮として引退くであらうが、それが喰はず嫌を隱蔽する遁辭であつたら、情無い所か詰責に値するであらう。とはいへ、淨瑠璃作者の第一人者たる近松門左衞門の百種にも近い作品、其どの作にしても、難解な所が多くある。關西殊に京阪辯は關東人に取つて意味の取りにくいことは古語とさう異る所がない。まして今とは生活法の異つてゐる元祿時代の通用語にあつては、一層の難解が伴ふ。加ふるに人形の活躍上に利便を與へようとして、思ひ切つた誇張を施してある。所謂濡れ場などには親子の間で顏を見合せるのならまだいいが、娘が袂で顏をかくす所が無いでもない。さうして其所が其劇の肝要部になつてゐる所、時の人の喜んで見た所であつた。顏を掩ふ娘でも實は見たくてたまらないのであつた。淨瑠璃は野卑だ、教育上の敵だと考へ、且つ說く者は、多く此方面にばかり目をつけるらしい。淨瑠璃はみんながみんなそれでないことを、先づ以て諒知して置いて貰ひたい。

2　淨瑠璃は大醇小疵

凡そ醇乎として醇なものは中正であらう、妥當性に富むであらう、雅馴といふものであらう。典麗とかいふものであらう。穩健無難といふものでもあらう。大醇にして小疵あるものは、どこやら軌條を外れた所があるやうでも、面白くもあり、悲しくもあり、刺戟が强いだけに感動もさせられる。啓發誘導といふ點では、此方が遙に大なる力を有する。教材としては醇乎として醇なものが半ばを占めるべきだが、それが多いと、平凡に墮してしまふ、飽かれてしまふ。よつて大

醇小疵物にも一部を割くべきで、淨瑠璃はまさに此部に割込むべきものである。どうせ幾十頁に及ぶ長篇物から四五頁を抽出するのであれば、如何に內容が緊縮されてあり、如何に敍述が巧緻を極めてあつても、到底侯鯖の一臠たるに過ぎないことは勿論である。徒に光景敍述の秀でた所でも取出すなら知らぬこと、苟も人情曲盡の箇處、忠孝節義の念を涵養すべき箇處といふことになれば、時に十頁二十頁にも及ぶ處を收錄しなければならぬ。元來、現行國語教科書は四五頁程度の長さに限られてゐる文の集りであるかの觀があつて、總體短文に失してゐるのではあるまいか。風雅以上、優美以上、輕妙以上、滑稽以上に立つて、德義の念を養ふに足る良教材なら、十頁でも十五頁でもよいことは、いはなくても極まつてゐる。長くては生徒が飽きるといふのは小學校のことである。中等教育程度にあつて、生徒が飽きるとしたら、教材が馬鹿げた物か、教員に之をこなす力が無いかのどちらかである。淨瑠璃や謠曲は實に教員の能力に對する試金石である。此意味に於ても特殊教材で、教員が腕一ぱいに說ける所、生徒が感動せしめらるべき處に屬するのである。さらば如何なる個處がさうも效果のあがる所であるのであらう。先づ從來注目せられた個處に就いて一應の說明をして後、徐ろに然るべき處を提出して見ることにする。自國のものを蔑視して舶來物ばかりを尊んだ時代には淨瑠璃に背を向けて、テルの頭上の林檎やベニスの商人の法廷の場なんかに十頁二十頁を避いて新樣を誇つたりもしたが、今や其傾向が薄らいで來てゐる。よつて過去の迂陋を批評することなく、將來に關して立言を試みるであらう。

3　文學史と讀本に於て

文學史はいふ迄もなく、文化史の一部をなすもので、手短かにいへば精神生活の變遷を說くのが任務である。然るに簡明に敍述しよう、成るべく各種の文學に觸れて行かうといふ、相容れない兩面に眼を注ぐ結果は、知らず識らず其たやすきを選んで、文學書を數多く紹介し、爲に解題づきの書籍目錄といふに落ちてしまふ。わが日本文學史としては、伴蒿蹊の「國つぶみ世々の跡」が先づ先頭に立つものである。明治に入つては、榊原芳野の「文藝類纂」も此種類に近い

著書であり、中年頃になつては大和田建樹の「和文學史」三上高津兩先生の「日本文學史」に「日本文學小史」此間に新保磐次氏の教科書風に敍したもの、芳賀矢一先生の國文學史十講拙著の「國文學史教科書」藤岡作太郎さんの「日本文學史教科書」と續々出ることは出たが、とかく古今の書物の説明づき見本市の如き體裁で、淨瑠璃の見本を示したものは日本文學史にあつては國性爺合戰の「千里が竹」拙著の「女殺油地獄」の一節、藤岡氏著の「曾我會稽山」の一節、それに和田萬吉さんの國文學小史に「鑓の權三重帷子」の一節、拙著などよりも少し早く出た佐々政一さんの日本文學史要に曾我物の一節が抄錄されてゐたことを記憶する。明治三十七八年戰役後には、諸家の國文學史が刊行されたが、概ね此類の抽出に終始してゐた。大正になつても大差がなく、彼の荻生徂徠をして、近松の妙は此所にありと激賞せしめたといふ「曾根崎心中」の道行、「此世もなごり、夜も名殘、死にに行く身をたとふれば、仇しが原の途の霜、一足づつに消えてゆく……」のあたりは、話には出ても、道行の全文は示されなかつた。丹波與作の重の井子別れの段、降つては菅原傳授手習鑑の「寺子屋の段」の如きは專門學校程度の教科書に至つて始めて教材として採用された。

文學史以外の國語讀本、特に中等教科用のには、どんな處が採用されたか、不思議にも前述の文學史に引用された個處がほんの申譯ばかりに一課、せいぜいで二課が掲げられただけである。それといふも、著者の顏觸から判ずれば、淨瑠璃を自ら讀んで選拔したものは、絶無ではあるまいが、僅有であることは爭へまい。他人が採用して、文部省で檢定してゐるものなら無難だといふ、憑他主義の現れがあゝなつたのではあるまいか。これ以上說くと、著者方に對して主張もなく、識見もなく、將來の國民をして如何にあらしむべきかの考慮でも足りないかの如く申すやうに誤解される虞がある。よつて、遠慮致すが、實をいつたら、あの長篇物が讀破出來るものか、それに相當に難解で、方丈記や徒然草の如く、ものの一時間も費せば、二三課が拾へるといつた容易さが無い。といつた敬遠主義の現れだと、かう私は見るのだが、大して的は外れてゐまい。

何をいふにも、淨瑠璃と一口にいつてしまふが、古淨瑠璃は別として、近松以下の作品だけでも一千篇はある。細かな活字で組んでも四六判なら二三萬頁ぐ

らるはあらう。中には愚作・劣作・拙作・不作、箸にも棒にもかからない作も尠くないが、名作物も少くない。それだけ拾つて讀むにしても、五千頁ぐらるには目を通さなければならぬ。誰しの人かかる困苦に堪へて二課や三課の收得に甘んじよう。敬遠もされる筈である。先人選擇の踏襲もされる道理である。殊に世話物には味はふべくして、他に比類の無い構想や敍述もあるのだが、そんな物を入れると本の品位が下ると考へてゐる人もあるやうだ。人情を曲盡してあるのが下品だといふなら、源氏物語もそれであり、落窪物語もそれであり、平家や謠曲にしてもさうした處が喜ばれてゐるのではあるまいか。淨瑠璃にあつては、やや過度であるだけだ。そこで私は淨瑠璃に對して大醇にして小疵あるものと評量するのである。最も人の引用したものを孫引する人、人の作つた牛蒡で法事をする人には、こんな言をいつても耳には入るまい。

4　淨瑠璃の構成と採用箇處

名がこれによつて起つたといふ淨瑠璃姫物語は、十二段に綴つてあるので、一に十二段草子と呼ばれた。それが長きに失するので、其半分の六段に綴ることが行はれた。六段が古淨瑠璃の常型で、其正本は六段本とも呼ばれた。

これより先、謠曲が前述の如く一種の脚本で、何百篇となく作り出されてゐた。而して諸技の長を蒐めて集大成をしたものは能樂で、大成の殊功者は世阿彌である。其世阿彌が謠曲の構成を說いて、序破急の三部より成り、通じて五段から成るといたのだと思ふが、時代物は五段より成るのが常法、世話物は上中下の三段から成るのが通規であつた。さうして其肝要部は五段物なら、三段目の切と、四段目の口といふことであり、世話物なら中の卷に最も想を凝してある。讀本にあつても、文學史の引例にしても、此肝要部から抽出するのがよいのだが、四五頁でまとまつてゐる處といふ要求は、此部から抽き出すことを許さず、却つて他の部分に於て多くを見出さしめる。重の井の子別れも上の卷なら、鑓の權三の、夫の留守を預る妻の心づかひを寫してあるのも上の卷である。それといふは、中の卷からのものはとかく長く引かなければ構想の妙を示し難いが爲である。

さて徒に採用すべきこと及び採用されたもののみを述べず、新に教材として使用し得るものを提出するであらう。近松の作、世繼曾我の卷頭大序から、遂に屍は夏の野の草葉の露と消ゆれども、譽は富士の上もなき雲ゐに名こそ揚げにけれまでの御前問答の場がよいと思ふ。五郎時致を描き出して躍如たらしめてゐる。本當は虎や少將が出て情緒纒綿の處に作者の苦心が存し、光彩が一段とあざやかなのだが、例の士君子に嫌はれもしようかと思つて、女氣のない箇所を第一に擧げたのである。もう一つ源氏烏帽子折の第一段「爰に比企の藤九郎盛長とて源氏重代の勇士」と起し、義朝の墓前に於て澁谷の金王丸と卒塔婆曳をして互の心を知合ふあの一節はどうだらう。幸若舞曲「和田酒盛」の草摺曳から出た趣向で、ゑいや〳〵と捻ぢあふ所の形容も、それから出てゐるのであつて、これにも女氣がない。あつても苦にならないのは此作の第二段、常盤雪行の處である。此處はよく繪にも描かれて、詩人もよくこゝを題にする。梁川星巖の作「雪壓笠檐」は知らぬものもあるまい。もつと露骨にいへば、道行の終の方「降る雪のおと聞く程の靜かなる竹より奥の一つ庵」と宗清の忍び妻の住居を寫し、その軒下に親子四人が雪をよけて臥す處から始めて、

此上は運に任せてともかくも、今宵は爰に明かさんと、少し風よぐ軒蔭に、小袖の褄の上がひを、敷寢の床とかたしかせ、笠をならべて屏風とし、昔は翠帳紅闈に隙間の風も寒かりし、身はならはしと身を捨てて、兄弟に降る雪を打拂ひ打拂ひ、あはれとぶらふ小夜千鳥、泣いて其夜を更かさるる。

のあたり、常盤が先づ悪寒を起せば、今若乙若の二人が身狹の小袖を脱いで母の裾や枕に取重ね、牛若も目をさまして母の懷より這ひ出で、見るを見まねに、衣を脱ぐあたりは、木石ならぬ者に貰泣をしない者はあるまい。母は氣も絶え、目も眩み、三人の子どもをかき寄せて、抱き伏して泣く所までの文字を拾つても、立派な一課を爲す好箇の教材である。

此他時代物にはいくらもあり、世話物には更に多い。ただ遊里情調の溢れてゐる、いやそれ程でなくても、惆悵描寫の處はやはり士君子に嫌はれる處があらう。そこが大醇小疵の點で、元より近松なり誰なりが國語教材として筆を執つてゐるのでないから、今にあつては如何ともなし難い。けれども女殺油地獄の

中の卷に於ける養父の義理立や實母の愛憐隱掩の箇處などは、些の猥雜味も無い好箇の良教材であり、忠兵衛梅川の「冥途の飛脚」の下の卷、談義詣より歸る孫右衛門の下駄の鼻緒を切つたあたりがよからう。本當なら封印切の處がよいのだが、これも遠慮して申す。長町女腹切の下の卷は全文が教材になし得る。山崎與次兵衛壽の門松では、商人道德と武士道德の差異を說く將棊の段、心中天の網島や心中宵庚申にしても、讀本の四五頁や七八頁を與ふべき千五百字や二千字の一節は容易に搜ね得るであらう。

以上は主として近松門左衛門の作品に就いていつたのであるが、紀海音、竹田出雲等以下の作で、傑作として、當り作として知られてゐるものには、教材として採用すべき所がいくらでもある。誰も知る寺子屋の段ばかりを指すのでなく、假名手本忠臣藏といふ觀客の共鳴を呼んだもの、いや今も芝居道の獨參湯と呼ばれる作のあることを述べるのでもない。平假名盛衰記や義經千本櫻や一谷嫩軍記の如き周知の作品もあるではないかといふのでもない。存外な作品中にも教科用としては適切恰當な一節が存在して、人の着目するのを待つてゐるであらうことを述べたいのである。

又右にいふ所は義太夫物に就いての事であるが、他に江戸淨瑠璃と呼ばれる半太夫節や河東節で語られた端物淨瑠璃といふ名の下に考へられて來た單篇物が二三百篇以上もあり、上方淨瑠璃が江戸化して劇場で用ひられた常磐津、富本清元等には一千篇以上の作品が語られた。此等は義太夫物以上に特殊扱を受くべきもので、總評を下せば寄木細工の如きもので、當り文句の點綴といふ以外に、あまり清新味のないものである。さうして概ね舞踊の地をなすものであるだけに、それぞれ拘束のあるものであつた。加之其作は大抵學問のない狂言作者の手になつたものであつた。世に無筆の名文ほど讀み下せないものはなく、無學の名文程筋の通らないものはない。往年坪內逍遙さんが評して「美しき寢ごと」といはれたが、さう見られても抗辯は出來さうも無い。文學史がこれに言及して、一二の見本を示すのは結構だが、讀本の上には差向載せる必要はあるまい。

5　結語

古人は今人のやうに劇を嚴肅なものに考へてゐなかつた。作者も役者も見物人も一切が娯樂物と考へてゐた。要は面白くさへあればよいといふのであつて、古實詮義なんどはてんで考へてもゐなかつた。近松門左衞門が穗積以貫に向つて、自分が筆を執つてから身分や職業を用語や態度の描寫の上で示すやうにしたと說き、一方には藝は虛實皮膜の間を行くべきもので、必ずしも實寫ばかりが面白さを保つ所以でないことを述べてゐる。淨瑠璃に對しては、常に此言を味ひ乍ら見るべきである。これも二十年程前の話だが、故實家として知られた關根正直さんに「近松の作と故實」といふ題で、一篇の起稿を願ふつもりだと私に語つた某雜誌記者があつた。私は恐らくお引請けになるまいといつた。然るに其後關根さんが引請けたと自分自身で私に話された。さては故實の穿鑿なんかはしてないといふ說明をされるのだらうと思つた。すると又十日ばかり後に、いや近松はてんで故實なんかは考へてもゐなかつた事がわかつたので止めたと語られた。全く其通りなのである。諸君大織冠藤原鎌足の時代にすてきな廣い毛氈があり、今の支那料理もあれば、大きな塊をなす氷砂糖もあり、十二一重を着た遊女が駕籠の中から轉び出て男の胸に飛びつくといつた敍述がある。こんな程度の無法構想は時代物にはいくらもある。詰り、時人に面白くさへ思はせればよいといふのが立前で、入鹿でも、鎌足でも、義經辨慶でも、靜や虎や少將でも、悉皆元祿人の性情を有する者として寫してあつて、史上の人物の名を借用してあるだけのことである。學問のあつた近松でさへがこれだ。他の群小作者連の筆になつたものに至つては、蓋し想像に餘るものがあらう。

終に數行を添へる。國語には其形式方面卽ち言語文章に關しては理解の仕方と發表の方法とを敎へなければならぬ。然るに以上の說明は主として淨瑠璃を內容方面から見て說いた。自然形式方面はまるで考慮に入れてゐないやうに見えもしたらうが、さうでは無い。淨瑠璃を敎材にしてあれば、他の課には出ない敍述があつて、理解力の養成には十分に役立つ。ただ發表方面に對してどれだけ模範となし得るかが問題で、これから譬喩とか引用とかを敎へられる

ことはあり得ても、文體に於ては、てんでお手本になし得ない。もつとも戯曲作者にならうとする人に對しては、好箇の範文でもあらうが、それは專門も專門、甚だ以て限られた人に對してのことになる。よつて中等教育に於ける教材といふ意味で、上の如く陳述したのである。もしそれ專門家養成までの考の下に於て述べよといふのなら、立論點を異にして說明しなければならぬ。高々讀本なら二課か三課かの選擇に關することであれば、此邊で擱筆する。

藝淵耽溺　終

附奥溺耽淵藝

昭和十一年十二月十九日印刷
昭和十一年十二月廿三日發行

定價金貳圓五拾錢

著者　高野辰之
東京市麴町區九段一ノ七

發行者　株式會社東京堂專務取締役　大野孫平

印刷者　東京市牛込區改代町二四　田中末吉

發行所　東京市麴町區九段一丁目七番地
株式會社　東京堂
振替東京二七〇番
電話九段(33)自四二一〇番至四二一九番

（理想社印刷）

日本文學全史　全十二卷

第一卷　上代文學史上卷　佐佐木信綱著
第二卷　上代文學史下卷　佐佐木信綱著
第三卷　平安朝文學史上卷　五十嵐力著
第四卷　平安朝文學史下卷　五十嵐力著
第五卷　鎌倉文學史　吉澤義則著
第六卷　室町文學史　吉澤義則著
第七卷　江戸文學史上卷　高野辰之著
第八卷　江戸文學史中卷　高野辰之著
第九卷　江戸文學史下卷　高野辰之著
第十卷　明治文學史上卷　本間久雄著
第十一卷　明治文學史下卷　本間久雄著
第十二卷　總論・年表　吉澤・高野・本間三氏著

724
52

114

12年 4月 8日

閲覧済

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black